

僧侶に喜捨している僕の母

ラオスの習慣の一つである喜捨を簡単に紹介しようと思って、僕の母を主人公として、今回の文章を書き、筆者の近くによく見られる行動を説明しやすいし、みんなに伝えることでしょう。



僕の家族は元々母、父、弟、僕と含めて、4人がいました。2003年に父と弟が亡くなったので、今二人で生活しています。あの年から、母は毎朝5時に起き、家の近くにある噴水公園で15分ぐらい散歩して、家に戻り、喜捨するものを準備して、また6時前に出かけて、あの公園にお坊さんたちに来ることを待ちます。お坊さんが来る時間が正確に決まっていないが、町中に歩いて托鉢するので、6時ぐらいに公園に通るのです。ビエンチャンはお寺が多いので、托鉢する道が決まっています、公園に通る僧侶はワットシーサケートというお寺からのお坊さんです。近所の人たちも4-5人来て、母と一緒に待っています。お坊さん着たら、みんなに一つの行で並び、膝で座って、喜捨物をあげます。あげに終わってから、お坊さんたちはお経をあげながら、水を土に流して、母たちも水をお皿に注いでおいて、後で大きい木の下に流すか家に戻るときに、植えてある木に流します。これで朝の喜捨は終わりです。母は毎朝だけではない、毎年、父と弟の誕生日や亡くなったの日にお寺まで行って、喜捨したいもの、誕生日のケーキまでも僧侶にあげています。

みんなさんは喜捨物がどんな物がいいか、なぜ水を土に流すのを疑問しているかもしれません。喜捨物は何でも良いです。気持ちでいいです。母の場合は、亡くなった二人を食べさせたい物をあげるのです。ラオス人は僧侶に喜捨して、死んだ人に届くことを信じるのです。水を流すのは今のやっていたこと、徳をつむことを亡くなった人にとどまらず、すべての生き物に、困っている人にいいことを会うように、みんなに分けて、一緒に幸せすることです。大きな木に流すのは、やはり頼りできて、根が深いどこまでも届くでしょう。



喜捨する意志はそれだけではありません。あくまでも、あれは僕の感じたことで僕なりの理解で紹介しました。他の意志は、自分の息子が出家しているので食べさせたい物を喜捨するとか、徳を積んで、今困っていること、苦しんでいることを解決できるとか、輪廻転生からの解脱を願い、或いは来世にもっといい生活に生まれるように願って、喜捨します。他に、喜捨する人は女性が多いと感じられるでしょう。男性もやっているが、少ないです。それは、生活の中に、家事するのは女性が多いからでしょう。みんな毎日喜捨するわけではありません。自分の誕生日の日だけに喜捨するとか、遠いところに出発する前にするとか、人によって違います。

みなさん、いかがでしょうか、喜捨してみませんか？

2007年6月13日

サイ